

# ENGINE 03

エンジン No.222  
Mar.2019  
定価  
1080yen

巻頭特集：エンジン恒例、“1台じゃ満足できないクルマ好き”大集合。

## 2台持つと、 クルマはもっと楽しい!

海外取材：新型ポルシェ911、そのテクノロジーを解剖する。

国内試乗：ランボルギーニ・アヴェンタドールSVJ／新型シボレー・カマロ／

レクサスUX／新型プジョー308ディーゼル

ファッション：ENGINE GEAR BOX 「春一番、コレが欲しい!」

時計：いま、ドイツ時計に注目!





センスの良いC邸のインテリア。クラシック・バイクに見えるのは、所ジョージの世田谷ベースから生まれた、スネークモーターズのバイク。書斎のUSMシェルフには、沢山のミニカーが。右奥に見えるF1カーのモデルは、フェラーリ・チームから贈られたもの。



巻頭特集:2台持つと、クルマはもっと楽しい! 第2部 “スーパーカーのある家” 篇

#3 中庭越しにスーパーカーが見える目黒区の家。

# リラックスできる家とスポーツカー。

6台のスーパーカーが並ぶ圧巻のガレージが凄い目黒区C邸。  
4m超の天井高がある居心地のいい大空間には  
趣味のいいインテリアが並ぶ。

文=ジョー スズキ 写真=山下亮一

多くの人は、階段の向こうにガレージが見える上の写真の部屋を、リビングルームと思うことだろう。だがそれは大間違い。ここはCさん(53歳)宅の寝室だ。リビングは100ページに登場するが、そう勘違いさせるほどCさんはインテリアのセンスが良い。それはこの家を設計した、国際的に知られる建築家、岡田哲史さんも指摘するところ。

「自分の経験から、家に大きな階段があると視覚的な効果がある」と、家作りの際に希望したくらいだ。並大抵のセンスではない。たしかにこの部屋から見える階段は印象的だ。そんな提案をするCさんは、昔からインテリアが好きだったというが、クリエイティブな仕事に就いている訳ではない。なんと若い頃はバイクレーサーだったというから驚きだ。当時はスポンサーを見つけたら、才能もなかったと謙遜するが、活動を断念し事業家に転身。IT事業をはじめ、いくつものビジネスを成功させ、現在はこの年齢でセミリタイア。スーパーカーやバイクのある生活を楽しんでいる。

経歴からも分かるように、Cさんは、大のクルマ好きだ。事業が大きくなるにしたがい、好きが高じてスーパーカーを集め始めることに。そして11年前、集めたクルマを納めるべく、東京の目黒区にこの家を建てた。コンクリートの打ちっ放しの無機質さが好きで、弟さんの家を手掛けた、コンクリート建築が得意な岡田さんに設計を依頼した。要望は、6台のクルマが並列に駐車できる家。内訳は、4台分がスーパーカー用のメイン・ガレージで、2台分は普段



C邸の敷地は広いものの、道路と接するのは南側のみ。6台が並列駐車するスペースを確保し、メインとサブのガレージの間に玄関アプローチを設けると幅いっぱい。クルマを下からメンテナンスするため、ガレージの一角にピットを設けた。使用する機会は少ないが、お勤めだとか、道路に面したこの南側には窓を設けず、採光は中庭から行っている。普段乗りのクルマ用を想定したサブ・ガレージゆえ、アプローチの段差はスーパーカーではギリギリに。Gクラスは、「乗り味がよく、もっと早く乗ってれば」と後悔するほどの素晴らしい出来とか。ガレージの壁面には、写真家の小林悠佑氏による、Cさんのコレクションを撮った作品が飾られている。バイクはヨシムラS1。

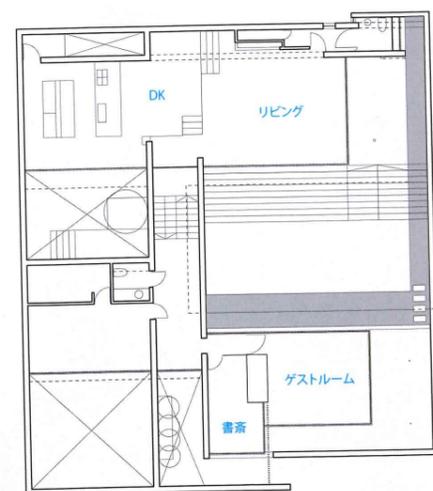


メイン・ガレージに並んだ4台で、合計48気筒。この4台を停める大空間のガレージ内には柱が無い。上の写真の左から右にかけて地面は緩やかに下がっているが、アプローチでスーパーカーが底を摺らないような設計が。バイクはドゥカティのGPマシン、デスモセディチが2台に、Mh900eが2台ある。

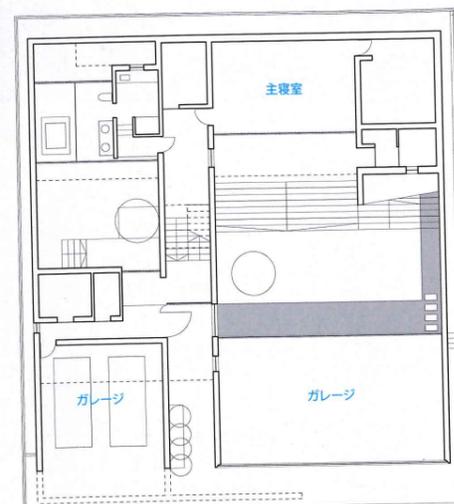
驚きのコレクション

それにしても、ガレージに6台のスーパーカーが並んだ姿は圧巻だ。メイン・ガレージに停まっているのは、左からジャガーXJR-15(1991年型)。世界限定50台の、公道を走るレーシングカーで、ルマン24時間レースなどを走っていたマシンがベースだ。次がフェラーリF50(1997年型)。言わずと知れた、フェラーリ創業50周年を記念する、世界で349台だけの公道を走れるF1カーとも言われる。そして次のランボルギーニ・ディアブルGT(2000年型)は、84ページに登場したHさんに以前譲ったクルマ。今はまた、Cさんの元に戻ってきている。そしてランボルギーニ・アヴェンタドールLP750・4SV(2016年型)。このメイン・ガレージの後ろ一面がガラス張りになっており、芝生と水盤のある中庭越しにクルマが見える構造となっている。

一方、この日のサブ・ガレージに納まっていたのは、ボディ・カラーとストライプの色の組み合わせがレアな、フェラーリ458スベチャレ(2015年型)。そして今回はスーパーカー特集ということで、ホンダNSXタイプR(1995年型)をわざわざ倉庫から持ってきた。普段はここに最終型のメルセデスG3



1.2F



B1.1F

構造：鉄筋コンクリート造  
 規模：地下1階 地上2階  
 敷地面積：523.46㎡  
 建築面積：261.63㎡  
 延べ床面積：455.88㎡  
 竣工：2008年  
 所在地：東京都目黒区  
 設計：岡田哲史建築都市研究所  
[www.okada-archi.com/jp/](http://www.okada-archi.com/jp/)



バスルームも、プライベートな中庭に面している。左は、インテリアショップのようなゲストルーム。中庭を挟んでリビングが見える。この家は完成してから11年になるが、美しく保たれているのは、こまめなメンテナンスの賜物。

岡田哲史：1962年兵庫県生まれ。早稲田大学大学院修了後、アメリカのコロンビア大学大学院で学ぶ。住宅や別荘からアートギャラリー・音楽ホールまで、空間性豊かな建築は定評が。国際的に知名度が高く、海外での設計・講演も少なくない。写真はロシアの「セリゲル湖の家」。現在は千葉大学の大学院で後進の指導も。



お家が一番  
 もっともこれほど素敵な家であっても、11年も住んでいるといくつかの改善すべき点に気付くという。なにしろ40歳の時の経験と感覚での家作りだ。50代の今とは感じ方が大きく違う。中庭に設けた階段は、予想以上に掃除が大変だった。開放的な家にするためガラスを多く用いたが、もう少し落ち着いた雰囲気でも良かったとも。とはいえCさんは、リゾート地に出かけるよりも、家で静かにリラクゼーションして過ごすのが好きだということだから、満足のいく家を形にした注文住宅は、何にも代えがたい存在なのだ。

は、およそ4m。もっともこれだけ空間が大きくなると、「生活していくてしっくりこない」ので、建築家の岡田さんは空間に変化を付けた。例えば、ひと続きの同じ空間にあるダイニング・キッチン部分の床は、65cm上げてある。斜線規制を避けることもあり、北側の天井を一部は大幅に低くした。こうして人の感覚に馴染む部屋が生まれたのである。  
 また、住宅街にあつて大きな敷地なので、控えめな家であるように配慮。スキップフロアを採用し、寝室などは道路よりも低い位置に。その上にあるリビングダイニングの天井は高いが、床の位置が低いので、隣家よりも高くないように設計されている。採光も、道路のある南側から行うのではなく、外側を囲い、いくつも中庭から採光するプランを選択。プライバシーを保ちながらも、開放的な家となった。



大空間のリビングダイニングは、豊かで快適な生活を日々おくれるよう、全体の構成から素材に至るまで、細やかな配慮でデザインされている。こうした設計が、海外でも高い評価を受けている岡田さんの得意とするところ。ソファにミノッティ、キッチンにBoffiを自ら選ぶなど、Cさんのセンスは抜群。



50d(2018年型)が納まっている。  
 「段々とメカニカルが熟成されていくので、最終モデルを手に入れるようにしています。このGクラスのように、特別な色のモデルが登場することもありますが、色は、それぞれのクルマに合うものを選んでいきます。ともあれ、なんといってもクルマは走らせないといいません。殆どのクルマはMT仕様で、入念に整備を行い、しっかり走れる状態にしています。日本で、所有するジャガーXJ R-15を公道で走らせているのは、私ぐらいかもしれません。」  
 もっとも最近では、思うようにスーパーカーを手に入れないようになってきたので、60年代のアメリカ車や80年代の日本車を集め始めているとも。  
 普段のCさんは、同じ趣味の仲間とツーリングをしたり、自動車イベントにクルマを出品するなど、スーパーカーとの生活を楽しんでいる。先ごろは奥様とお嬢様を伴って、世界中のカーコレクターが注目する、カリフォルニアのペブルビーチ・コンクール・デレガンスへ。これほどのクルマを所有しているので、海外の著名なコレクター達との交流も多い。また、84ページに登場したHさんのような新しいコレクターを、古くからのコレクター仲間を引き合わせることも。もちろん今でも、様々なクルマで趣味のレースに出場している。スーパーカーのある家に暮らして長いので、仲間の家作りの相談にのることも少なくない。  
 そんなCさんが自邸に望んでいたことのひとつが、天井の高いリビングルームだ。完成した部屋の高さ